



# ロマンを追って

元大分市長 上田 保物語



第四章 「趣味の法律」

デジタル版初版発行：2008年4月4日

●書籍案内

「ロマンを追って  
一元大分市長上田保物語」

著者：中川 郁二  
A5 版 194 ページ

発行：大分合同新聞社  
発行日：2003年2月15日  
定価：1600円（税込み）

購入問合せ：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ  
TEL：097-538-9662 「合同新聞の本」Web ページ



※奥付け／デジタルブックについて

- ・ 人気の秘密
- ・ 友人に勧められて
- ・ 超ベストセラー
- ・ 両豊倶楽部、発足
- ・ 旺盛な演出、座持ち
- ・ 安東、大分県師範の教諭に
- ・ 平八郎ら「六潮会」結成
- ・ 保、平八郎再会

第四章 ● 「趣味の法律」

発刊に当たって

▽月刊誌「ミックス」(大分合同新聞社発行)で連載した「政治は創造なり・元大分市長上田保物語」(2001年5月号～2002年4月号)に若干手直しを加え、改題して2003年2月に書籍「ロマンを追って一元大分市長上田保物語」を発刊。その書籍をデジタル化したのが、今回のデジタルブックです。 (本書に登場する人物の年齢や肩書き、施設名称等は、「ミックス」連載時点のもの)

# 第四章 「趣味の法律」

## 人気の秘密

NHKの人気テレビ番組の一つに、毎週土曜日の正午過ぎに放映されている「バラエティー生活笑百科」がある。

落語家の笑福亭仁鶴・相談室長の軽妙な司会で漫才二組が身辺雑事のトラブルを取り上げ、会場を笑わせながら問題提起。それをレギュラー二人とゲスト一人がこれまたユーモラスに白、黒の回答。最後に弁護士が断を下すという筋書き。つまり、難しい法律を面白く、分かりやすく解説しているのがミソで、人気の秘密になっている。

この「法律を面白く、分かりやすく解説する」という難事を、保は昭和初めの弁護士駆け出し時代にやってのけた。短歌、俳句、川柳、都々逸、義太夫、長唄、清元、流行歌、古文や小説のさわり、歌舞伎、新派のせりふなどを縦横に駆使しながら、六法、民法、刑法を解説した「趣味の法律」を昭和四年（一九二九）に出版したのだ。

三十五歳の時である。



超ベストセラーになった「趣味の法律」

## 友人に勧められて

長女美穂子が五歳で亡くなり、悲嘆に暮れていたとき、出版業をしていた友人が訪ねてきて「法律の入門書を出したいのだが、そんなに悲しんでばかりいないで、ひとつ、原稿を書いてみないか」と勧められた。それではと五、六枚書いて渡したところ、その友人は「これは売れる。続きを書いてくれ」と太鼓判を押してくれた。こうして参考書も見ずに一気に書き上げたのが、「趣味の法律」である。少年時代に作家を志望しただけに文才に恵まれ、表現力は豊かだった。

本をひもとくと、「義太夫『日高川』に『焦がれ焦がるる我が思ひ、心強くも偽つて捨て行く夫の面憎や』というのがある。たとい婚姻はしなくても夫婦約束をしておれば、法律の保護を受ける」「浅野内匠守が吉良上野介に斬りつけたのは、けがをさせたにとどまったから殺人未遂。大石良雄ら四十七士が吉良上野介の首をはねたのは、完全に殺人行為を遂行したのだから殺人既遂罪である」——といった具合だ。

## 超ベストセラー

この型破りの法律入門書は発売当時から話題となり、六百三十版を重ねるといって超ベストセラーになった。浅草小勤務時代の安東玉彦が上田家を訪ねた折、保の妻美苗が書生や学生たちと一緒に汗だくになって印税紙にハンを押し、印刷されたばかりの「趣味の法律」に張っている姿を目撃している。

後に保が大分中学校時代の同期生、北村宇吉（特許事務所経営）と二人で静岡県網代にある知人の別荘を訪ねたときのことだ。東海道線の静岡駅に降りた二人は場所を聞こうと駅前の交番に立ち寄った。北村がひよいと机に目を向けると「趣味の法律」が広げられている。早速、地図で説明をしようとしていた若い巡査に聞いた。

「君、これを読んでいるの？」

「はい。この本は分かりやすく、すいすい読めます」

「著者はこの人だよ」

こういつて北村が保を指さすと、巡査は最敬礼して、二人を別荘まで丁寧に案内した…。

保は昭和十二年（一九三七）に「趣味の法律・犯罪捜査から死刑まで」（趣味の教育普及会）を執筆している。

また「趣味の法律」は昭和五十二年（一九七七）に新たな装いで出版されている。執筆者は弁護士菊本治男。それまで何冊かの法律専門書を著し、当時、テレビにレギュラー出演していた新進気鋭の若手弁護士だった。保の著書の基本的な部分はそのまま生かし、法律の改正点や判例を分かりやすく現代風の表現で記述している。この新「趣味の法律」も好評だ。

## 両豊倶楽部、発足

「趣味の法律」の爆発的な人気で経済的な余裕と知名度を手



に入れた保は俄然、外へ目を向け、行動に移す。その手始めが在京大分県人会の大同団結だった。それまで、小グループの大分県人会や明治会、大分県青年会などがあり、各自で活動していた。

保は宇佐郡八幡村（現宇佐市）出身で当時、東京弁護士会長だった塚崎直義（戦後、最高裁判事）に働きかけて、これらの既存グループを統合し、昭和三年（一九二八）に「両豊倶楽部」を発足させた。会長に陸軍大将河合操を担ぎ出す。河合は明治十六年（一八八三）に杵築北台に生まれ、陸軍大学校卒。ドイツ駐在武官などを経て日露戦争に満州軍参謀として参加。関東軍司令官、枢密顧問官を歴任した大物である。

## 旺盛な演出、座持ち

保は九年に同倶楽部の常任理事となり、話題となるようなイベントを次々と打ち出す。その一つが旧府内藩主邸での花見である。

この時期、保は最後の府内藩主松平近説（明治十九年（一八八六）十一月十八日死去）の長男大給（おぎぎゅう）近道子爵（朝廷の命令で松平姓を本姓の大給姓に改称）に

旧府内藩主邸で催された花見会と保（右端）



懇請し、大給家の屋敷（現東京都文京区小石川）へ倶楽部会員や家族を招待させ、広大な庭で花見会を催している。

明治から昭和の初めにかけて、旧藩主やその子孫は超一級の知名士だった。

また、大分中学校の明治四十一年（一九〇八）入学組で在京者の同期会「くりくり会」を結成している。名称の名付け親は発起人の保。ぐりぐり”は、同中学校の運動場の片隅にある小高い栗々山にちなんだもので、保も昼休みには弁当を食べたり、遊び回ったものだ。当時、

宴会でお得意の手品を披露する保

（大分市長時代）



小石川に住んでいた当時の保と千鶴子、愛犬ボチ

二年先輩の福田平八郎から、中退のことや画家になる決意を打ち明けられたのも、この栗々山だった。

この「くりくり会」には、四十一年入学組のほか、その前後の入学者も参加し、一、二カ月に一回程度、東京の料亭で開いており、太平洋戦争の半ばまで続く。

保は下戸だったが、座持ちのサービスは旺盛だった。宴





浅草尋常小学校勤務時代の  
安東玉彦(右から3人目)

## 安東、大分県師範の教諭に

席で十八番の「がまの油」や手品を披露して、出席者を驚かせた。これらの隠し芸は苦学時代に先輩の山本彦市や遊びの達人、村上弘一に連れられて浅草などに遊びに行ったときに覚えたものだ。好奇心の強い保は街頭で香具師たちが繰り広げる大道芸に魅せられてそのセリフや仕草まで習得してしまった。

この時期、保は夕方になると、二女で小学生の千鶴子と柴犬の「ポチ」を連れて、近くの護国寺の境内をよく散歩している。護国寺は真言宗豊山(ぶざん)派の別格本山で、天和元年(一六八二)、五代將軍徳川綱吉の生母桂昌院の発願で創建された。開基は亮賢。林に囲まれた境内には仲磨堂、茶室など由緒ある建物がある。

一方、出向の形で浅草尋常小学校に勤務している安東玉彦はようやく、東京下町の生活に慣れてきた。精神的にも余裕の出た彼は法政大学夜間部に入り、ここで三年間、国語や漢文の勉強に励み、中等学校教員の資格を取得している。

昭和十年(一九三五)二月十一日午前、安東は講堂での

紀元節式を済ませ職員室に帰ると、机上に一通の封筒が置いてあった。裏には「大分県師範学校長、池上弘」とある。便箋に几帳面な字で「現在、大分県師範には、師範卒の教師が一人もない。これではよろしくないので、先輩の方々に推薦を依頼したところ、貴君が最適ということになり、採用することにした。帰県されたい」という趣旨のことが書かれてあった。

安東は早速、首藤積（安東が大分県師範生時の恩師）と加崎為五郎（保の義兄）の二人に電話した。二人とも「われわれが推薦したんだ。早く帰ってこい」。こうして、彼は東京へ出向してからちょうど十年目に当たるこの年の四月、大分県師範学校の教諭として迎えられた。

## 平八郎ら「六潮会」結成

京都で日本画家として自立した福田平八郎に大きな変化が生じた。美術評論家の横川毅一郎から、近く「六潮会」を結成するからぜひ入会してほしいという誘いがかかってきたのだ。六潮会は横川と中外商業新報（東京）の美術部長外狩素、心庵が呼びかけて、昭和五年（一九三〇）に発足した絵画の新グループ。参加したのは、日本画の中村丘



六潮会の例会に参加した平八郎  
（すべり台の上から3人目）

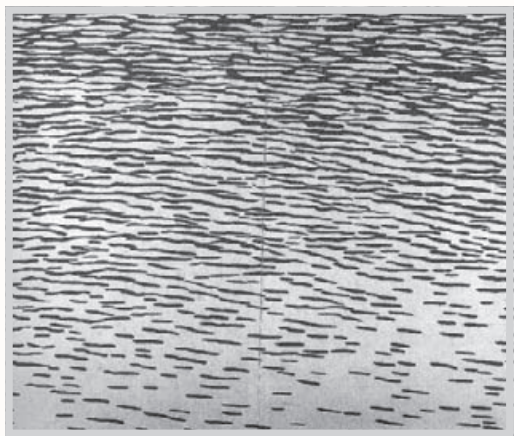
陵、山口蓬春、洋画の牧野  
虎雄、木村莊八、中川紀元、  
評論家の横川、外狩ら東京  
在住者と、京都からは福田  
平八郎。評論家を除く六人  
の画家はいずれも若手の  
“上昇株”で、斬新な作品  
を次々と発表している。「六  
潮一海に注ぐ」から六潮の  
二字を採って会の名称にし  
た。

六潮会の他の会員たちとの交流が刺激になって、平八郎は七  
年の第十三回帝展に「漣（さざなみ）」を出品し、画壇をあつ  
といわせた。

彼は京都市立絵画専門学校の助教授時代に中井宗太郎教授か  
ら伝授されたハエ（ハヤ）釣りがやみつきになり、琵琶湖畔で  
たびたび、スケッチブック持参で釣りをしている。その時の  
デッサンが、この傑作の基本になった。モダンな色彩感覚と装  
飾的感覚が融合した作品だ。この後「暖冬」「雪の野」「雪の日」  
などの秀作を発表する。

## 保、平八郎再会

六潮会の第一回展が七年二月に東京・三越で開かれ、平八郎  
は上京した。東京に着いた彼は三越の展示場に立ち寄った後、



話題作の「漣」（昭和7年）

そそくさと山手線の国電に乗った。行き先は日暮里駅近くにある朝倉文夫のアトリエである。

国電のスピードがこんななのろいのかと思えるほど、平八郎はもどかしかった。大分中学を中退して以来会っていない二年後輩の上田がアトリエで待っている。平八郎は日暮里駅を出ると、肌を突き刺すような寒風の中を駆けるようにしてアトリエへ向かった。

三階建てコンクリート造りの建物周辺のあちこちに残雪が積もっていた。玄関ドアの呼び鈴を鳴らす。ドアを開けたのは、保だった。

「やあ、久しぶりだね。頑張っているじゃないか」

「君、あの上田君？、変わったねえ。朝倉先生から君が弁護士になったと聞いていたよ」

二十二年ぶりの再会に感慨無量の二人に、「やっと、大分県産が三人そろったな」と奥の方から朝倉が声をかけてきた。朝倉と保は在京大分県人会で知り合った仲だ。その夜は、朝倉の妻やま子の手料理で、三人は談笑に時がたつのを忘れた。

以来、平八郎が上京した際には、必ずといつていいほど、三



朝倉 響子

人はこの朝倉のアトリエに集まり、談論した。話題は芸術論から文学論、ファッション、食い物、旅、釣りなど広範囲にわたり、いつも博覧強記の保が司会役に

なった。酒好きの朝倉だけがガラス製の銚子と杯でちびりちびり  
りと手酌を楽しみながら保の独演を聞いていた。

長女の撰（現舞台美術家）とともに学校に行かず、家庭教育  
を受けていた二女の彫刻家響子（七五） 〓東京都文京区〓は、  
当時のことを覚えている。来訪した平八郎は必ず、朝倉邸に泊  
まり、保の方はどんなに遅くなっても、帰宅していたそうだ。

また三人は家族ぐるみで付き合っており、保は時折、美苗や  
千鶴子を伴ってアトリエに遊びに来たり、朝倉は家族と一緒に  
京都観光を楽しんだ際には、福田邸に宿泊した。

響子は「上田さんはよくしゃべり、父と福田さんは聞き役で  
したね。福田さんはいつもスケッチノートを持参し、よく写生  
をしていました」と述懐する。

**N**



オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

#### デジタル版「ロマンを追って—元大分市長上田保物語—」 第四章●「趣味の法律」

2008年4月4日初版発行

著者 中川 郁二

原著 2003年2月15日発行／発行：大分合同新聞社／製作：大分合同新聞社文化センター／印刷：佐伯印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局 (〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内)

© 大分合同新聞社

著者略歴◇中川 郁二  
一九三七年生まれ、別府市出身。福岡県立修猷館高、早稲田大学卒。民間企業勤務を経て、大分合同新聞社入社。報道部長、別府支社編集部長、読者情報部長、論説委員、編集委員。